J.A.D.E

ふくりゅう

特定非営利活動法人
日本下水文化研究会会報

発行責任者　酒井彰（運営委員会代表）

平成20年10月5日
通巻58号

日本下水文化研究会

「水と衛生に関わる開発援助」フォーラムの開催のお知らせ

１．テーマと趣旨

日本下水文化研究会では、環境保全再生機構・地球環境基金の助成により2004年度よりバングラデシュ農村域において資源循環型のエコサン・トイレの導入事業を実施してまいりました。普及していくためには多くの課題が残されていますが、衛生改善とし尿の資源循環の見通しが得られています。昨年度からは国際協力機構の草の根技術協力事業として採択され、普及と技術的知見の集約を進めているところです。さらに昨年10月からTOTO水環境基金、本号の記事でも紹介しておりますように、本年10月から三井物産環境基金それぞれの助成を受けた活動を展開しており、バングラデシュ国内で、活動エリア、活動テーマ、協働するNGOはひろがりをみるようになりました。

このたび本会のこれまでの活動で得られた成果を共有し、衛生分野での国際協力にどのようにかかわっていくかについて、関係者をお招きし議論したいと思います。

また、2008年は国際衛生年にあたります。その経緯については、昨年の研究発表会パネルディスカッションでも取り上げられましたが、日本が提案し、国連が取り上げたという経緯があります。本会としては、これまでの経験から得られた情報を発信し、また、小さな企画とはいえ、関係者と情報を共有する機会をもつということはたいへん貴重といえるでしょう。水と衛生、国際協力に関心をもたれる方々の参加をお待ちしています。

２．開催要領

日時：12月7日（日）　13:00 － 17:30
会場：JICA地球ひろば会議室
東京メトロ日比谷線　広尾駅下車　徒歩１分
渋谷区広尾4-2-24（6ページ案内図参照）
TEL　03-3400-7717（代表）
主催：日本下水文化研究会
参加費：1000円（資料代として）

プログラムは一部未定ですが、下記の通りです。変更があった場合には、ホームページ等でお知らせいたします。

13:00　開会
13:05　基調講演（演題未定）
北海道大学大学院教授　　船水　尚之
13:50　第１部　途上国におけるトイレの普及活動
「バングラデシュ農村域における資源循環トイレ導入の経験と展望」
日本下水文化研究会
高橋邦夫、保坂公人、高村哲
「楽しみながら学ぶトイレ・衛生教育」
日本トイレ研究所　　加藤　篤
「ベトナム南部沿岸地域の小中学校への衛生改善活動報告」
日本下水文化研究会　　佐藤　八雷
「中国内モンゴル自治区における都市型エコロジカルサニテーション導入の事例報告 」
京都大学特定助教　　原田　英典
16:15　第２部　「水と衛生」に関わる活動展開
「水と衛生に関わる開発援助の方向性」
日本下水文化研究会　　酒井　彰
16:45　総合討議
17:30　閉会

３．連絡・お問い合わせ先

参加ご希望の方は、参加希望の旨、下記までご連絡いただきたいと存じます。

NPO法人日本下水文化研究会　事務局
（担当運営委員　高橋邦夫）
〒162-0067　新宿区富久町6-5 NJS富久ビル別館
電話：03-5363-1129　FAX：03-5363-1129
e-mail：jade@jca.apc.org

三井物産環境基金により本会活動の助成が決定

『バングラデシュ農村地域での水と衛生に関わる生活改善活動』を始めるにあたって

本会運営委員会代表　酒井　彰

本会が、三井物産環境基金に申請しておりました活動案件「バングラデシュ農村地域での水と衛生に関わる生活改善活動」の採択が決定しました。2008年10月より２年間、助成金額は380万円です。

今回採択された活動は、５年目を迎えた本会海外技術協力事業にとって、２つの大きな意味をもつものと考えています。ひとつは、これまで衛生的で資源循環を意図したエコサン・トイレの普及を図ってきましたが、今回はこれに加えて安全な水供給も併せて行おうとするものであるということです。もちろん、われわれのトイレ普及は衛生改善以外にも多面的な目的をもつものですが、今回、トイレの普及から活動範囲を安全な水供給に広げようとするものです。今年は国際衛生年ということですが、開発途上国の生活環境改善の一環として、ほぼ例外なくいっしょに語

られる「水と衛生」を、個々のプロジェクトレベルで、統合的に計画しようという例はあまりみられていません。とくに、エコサン・トイレのメリットのひとつとして、表流水への環境インパクトが小さいということをあげてきたわれわれとしては、ヒ素汚染対策として表流水を水源とする水供給施設に併せて、適切なトイレの普及によって水源水質の保全を図ることを統合的に実施することは念願でもありました。バングラデシュでは、おもな井戸水のヒ素汚染対策として深井戸（Deep Tube-well）が適用されることが多いのですが、深井戸が必ずしもヒ素を含まないかと言えばそういうことはなく、また、塩分濃度が高いことも多く、この場合は味の問題やポンプの腐食などの問題を起こします。

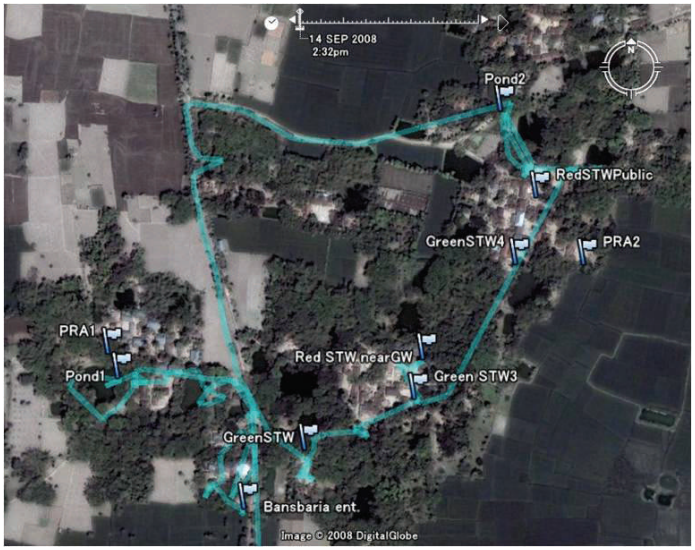
もうひとつの転換点としては、本会のバングラデシュ・オフィスが直接活動を実施するということです。これまでは、政府機関、地元の NGO をパートナーとして、本会は、資金的、技術的に活動を支える立場にあり、バングラデシュ・オフィスのスタッフは、さまざまな手続きや活動の監視など、日本のメンバーの補佐役という位置づけにありました。今回は、昨年の研究発表会にも参加した、T. アーメッドさんにプロジェクト・マネージャーの任務を果たしてもらうことにしました。彼も、以前の所属先ではかなり大規模なヒ素対策事業を中心的に担った経験をもっており、この８月にプロジェクト終了から５年が経過した水供給施設を視察する機会がありましたが、その多くは継続的に利用されていました。もちろん、まだまだ弱小の組織ですし、何から何まで本会だけで実施するには、スタッフの拡充も必要になり、それは資金的にも制約が大きいので、これまでのトイレの普及活動で協働してきた団体からの協力も仰ぐことにしています。具体的には、現地でヒ素汚染対策の実績をもち、TOTO 水環境基金によるエコサン・トイレ普及でも協働したアジアヒ素ネットワーク（AAN）、エコサン・トイレ普及活動のパートナーとなってきた NGO である SPACE、そして、今回、予定しているプロジェクト・エリアを基盤に活動しているローカル NGO の IDO などで、協力の要請を受け入れてくれています。

この９月、活動の進め方の方針を議論し、上記した団体への協力要請を行い、実行予算の作成を指示するとともに、現地の状況を視察しました。表流水を水源とする安全な水供給施設としては、池の水を緩速ろ過する Pond Sand Filter (PSF) がありますが、この場合池を提供してくれる人がいなければ実施できません。また、施設完成後の維持管理を考えれば地元の熱意や協力も必要になります。今回訪問では、幸いにも２人の池の所有者が飲み水の水源として提供しても良いと名乗り出てくれました。この地域の多くの池は魚を飼って、市場に売ることで生計の足しにすることが多かったのですが、近年、河川に土砂が堆積し、農地からほぼ一年じゅう水が引かないため、農地を養魚地に転用することが少なくないことも関係しているようです。この土砂堆積の原因も国境が近いインドによる土砂まじりの放水だといわれていて、気候変動ばかりでなく、人為的災害からも自由になれない国であることを痛感せざるを得ません。

これからは、準備調査として、２つの村を対象とした井戸水ヒ素汚染調査、対象とする村の飲み水と衛生の実態を含めた社会環境調査、住民意識調査、池の水をはじめとする表流水の水質調査、池底などの土質調査を行い、池の水の保全策としてのトイレ導入を含めた施設計画の策定へと進めていくつもりです。

バングラデシュで JADE（本会の英文略称）は、エコサン・トイレのプロモーターとしてみられているきらいはあると思いますが、私たちの活動の本来の意図は、現地の人々の生活改善であると考えています。今回の活動開始はその方向への一歩であるととらえており、活動の英文タイトルを" Integrated Project to Enrich the Living Environment through Providing Safe Water Supply and Sanitation"としました。さらに、プロジェクト実施にあたり、専従スタッフを１名増やし、そのほかにフィールド・ワーカー１名を雇うことにしています。彼らを育てていくためにも継続的なプロジェクト確保が欠かせないことになります。

一方で、エコサン・トイレの普及については、けっしてやみくもに進めるものではなく、その地域的な適用性を明らかにしつつ、これからの普及は、できるだけバングラデシュの人たちに任せていける方法を考えていくつもりです。



水源として提供してもよいと申し出のあった池のひとつ（上）と村の航空写真（下：Google Earthによる）

旧事九官録　巻７

ランドルト環の事

運営委員　森田英樹

『右ナナメ下』『左』『上』『う～ん、わかりません』『右』『わかりません』誰でも一度は経験した事がある視力検査での１コマである。なんでも、この検査で使われる『C』の様な記号をランドルト環というらしい。フランスの眼科医エドマンド＝ランドルト[1846～1926]によってつくられ、1909 年に国際眼科学会で国際的な標準指標として採用された。とすると、来年はランドルト環誕生 100 年となる。何かの話題として使えそうだ。子供の時から視力検査の順番待ちをしている時に、「そうだ、来年こそは事前に検査表を全部覚えておき、スラスラ答え、皆をビックリさせてやろう」と思っていた。『これで僕も皆の人気者になれる』そんな事ばかり考えていた。生来、計画性も忍耐力も実行力も縁遠い私は、ついに『皆の人気者』にはなれなかった。

京都の東福寺に有名な東司がある。別名、百間便所とも言われる大きな建物である。国の重要文化財に指定されている事もあり、多くの書で紹介され大変有名である。皆さんの中にはご覧になった方も多いことと思う。しかし、残念ながら内部に入ることは出来ずに、格子窓から中の様子を覗くだけだ。見学された方は、恐らく皆、建物内部の遥か後方に掲げられている、東司の解説文が気になったに違いない。何と書いてあるのか、力いっぱい格子窓に額を押し付け、目を凝らし見ても遠すぎて全く読めない。この悔しさはランドルト環が読めない比ではない。子供の頃、視力検査表を覚えなかったグウタラな私ではあるが、今回は何とか読めたので以下全文をご紹介しよう。

東福寺　東司の内部

東司について

禅宗に於ける東司とは便所の通称である。
東司の古い遺構としては、室町時代に再建された当寺のものが唯一であり、延宝八年（1680 年）恵日山東福寺指図によれば桁行 14 間３寸、梁行５間２尺の大きな建物であつた。延宝及び天保年間に至るまで当時の模様を伝えていたと思われるが、現存建物は、間側の正面、奥行９間の堂宇であり、便壷の位置等にも多少の変異がみられる。明治 14 年、当時の状態を示す図からこの東司は古規伝承の機構をもつた便所であつたと推察される。現在残されている室内の設備としては、向かつて右側３間は大便、左側は小便用、右側奥３間と左側２間には手洗用の壷が伏せられている。往時はこの便壷の上に槽脣があり、隔壁に仕切きられ至便にして用いられていたものと思われる。（全体図参照）

東司使用の作法

東司使用には厳しい規則を定めている。
入堂、着衣を浄竿の正す。図（１）白紙に記号なし月輪の如く円にして浄竿図（２）に列す、自他の竿位を乱さぬための絆子である。図（３）怒声、笑語を許さず、門扉外より催促する等々又入厠、洗浄、洗手、浄身、去穢の５項に律せられている。使用の概頃は、浄桶図（４）に水をもりて右手に提し図（５）左手にて門扉を掩ず図（６）浄厠にのぼる－換鞋、蒲鞋す。図（７）槽脣の両辺を踏みて蹲居して用を足す。屙屎後－使籌する（籌は不浄を拭う具で籌架図（８）に置かれている。籌断面三角形に造られた長さ約 65cm 木製のものである。触籌は籌斗図（９）＝水を貯えた筒＝に投入する。
次に右手の浄桶の水を左手に掬をつくり受ける。先づ小便を３度、ついで大便を洗う。洗浄如法にして浄潔とする。右手に浄桶を持ち厠門を出る、自鞋にはきかえる。図（10）浄桶を本所に安ず。図（11）

洗手の方法－右手に灰匙をとり瓦石、手をとぎ洗う具で魚形のものもあつた。図（12）の表におきて滴水、とぎ洗うこと３度つぎに土をおきて水を点じて３度洗う、更に皂莢（たちばなの実を粉にしたもの）をとり水に浸してもみあらう。注、小壷の中に灰、土たちばなの粉が入れてある、大桶の水を小桶にうつし腕に至らんとするまでよく洗らう。洗らい終わると公界の手巾を用いて拭い洗浄が終る。
誠心に住して慇懃にあらうべしと教示されていて、正に近代化に通じる程の清潔さである。厠中の洗浄は冷水を用いられていたが冬期に至りては、温湯を用いることもあった。

当時の東司には給湯用の「鑊」が設けられ、釜１隻図（13）が置かれていた。濡れた手巾を乾燥させるための焙炉の設置等も該場所に設けられてあつた。堂内のもとの設備はどの様なものであつたものか、今少し定かではないが便壷を囲こむ柱の礎石を辿り、腰貫のほぞ穴も多少入組の乱れはあるが、浄厠、手洗の間仕切等、絵画面とし旧に復元してみた。

東福寺

と、まあ、こんな内容であった。全文を読んでみると、私の視力の限界なのか、誤字らしきものや、文意が通りにくい箇所も散見される。また図（１）～（13）とあるが、一体どこに合致するのかも不明である。そんな事もあって、わざわざ遠くに設置されているのかと邪推してしまった。いずれにせよ作法の雰囲気は伝わる。

さあ、まもなく季節は秋。京都に行こう。これさえあれば、あなたも『皆の人気者』さ。

［使用上の注意］

本文にも記したように、判読の難しい部分、誤字、略字と思われる部分があり適宜改めました。その為、本文をお読みの場合はその点をご了解ください。また、本文を更に詳しく研究したい方は、私がどのように読んだのか、タネ明かしをしますので、お問い合わせ下さい。

第43回 定例研究会（兼第52回 屎尿・下水研究会例会）報告
「下水道管路管理の課題」

平成20年7月11日（金）、標記のタイトルでの講演会を東京・新宿のTOTO新宿ショールーム・プレゼンテーションルームにおいて行いました。講師は、日本下水道管路管理業協会専務理事の田中修司氏にお願いしました。下水道管路管理が抱えている課題を提起していただくとともに、それを解決していくために模索している「技術開発」、「人材育成」などへの取組みについてお話していただきました。また、田中講師が最近、ドイツを訪れた時に見聞した「屎尿分離型水洗トイレシステム」の紹介もしていただきました。講演の骨子は、以下のとおりです。

① 下水道管路の維持管理については、費用と人員を投入しても実施していかなければならないという切迫感が欠けており、この分野における調査研究も遅れている。
② 最近、多発している道路陥没の原因すら必ずしも明らかになっていない。
③ 下水道管路の詰まりの原因には、木の根、ラード（油）、土砂、モルタルなどが挙げられる。
④ 管体の亀裂、継ぎ手の止水不良箇所からの地下水の浸入により、周辺の土砂が管内に流入し地盤に空洞が形成され、これが道路陥没を引起す。
⑤ 道路陥没を力学的に考えると、取り付け管の本管への付け方法、車両加重の増加、交通量の増大などが影響している。
⑥ 下水道管路を管理している現場は、さまざまな危険性（滑る、流される、有毒ガス、衛生状態）を抱えている。
⑦ 以上の問題を解決していくには、各種データ（特に流量）の継続的な蓄積、非接触型のセンサーの開発、光ファイバーなどの神経系統の確保などが必要となる。
⑧ 包括的民間委託、指定管理者制度の実態についてのコメント後、管路管理における課題（性能指標をどう定めるのか、受託側のリスクの負担方法、第三者機関による監視・評価）を述べる。
⑨ 受託側の管路協としても、管路管理技士制度（総合、主任、専門）を充実すべく努力している。
⑩ ドイツで、屎尿分離型水洗便器（便器に仕切りがあり、小便と大便を別々に収集できる）を用いた下水道システムを見聞した。小便は直接農地へ還元し、大便は嫌気的処理を行った後肥料として利用する。人が服用する医薬品成分が環境へ拡散することを防ぐことがこのシステム導入の背景にあるとのこと。

（運営委員・地田修一　記）

バングラデシュ便り５号 (Sept./2008)

リサイクル社会

本会運営委員　高橋 邦夫

バングラデシュは、発展途上国、開発途上国のひとつに数えられる。その定義は正確には知らないが、少なくとも開発途上国ではなく、また、ほぼ完璧に近いリサイクル社会を形成しているのである。

バングラデシュが開発途上国でない理由は、国土の隅々まで開発し尽くされている現実を見ればよい。Sundarban はマングローブとベンガル･タイガーの生息地として世界自然遺産に挙げられているが、それは国土のごくごく一部なのである。つまり可住、可耕に適さないため放置された結果に他ならない。ついでながら野生生物生息地の喪失率から見たこの国は、砂漠の国はともかく、モンスーン気候帯にありながらその指標値が最も大きな国の一つなのである（IUCN ：国際自然保護連合，UNEP ：国連環境計画，1986）。ちなみに94%であり、これを超えるのは香港の97%である。

ガンジス、ブラマプトラ、メグナという三大河川の流末に位置するこの国は、国土面積の十数倍の流域を背負っているという地勢的要因に加え、イギリス支配、ベンガル分割、インド独立運動、インド･パキスタン分離独立、パキスタンからの独立と、相次ぐ紛争の経過の中で洪水防御など国土基盤整備には覚束無いものがあったのは事実であろう。そうした反面、強大な洪水などの外力を巧みにいなす国土利用がなされている事実を見逃すわけにはいかない。端的にいえば河川のほとんどは無堤ではあるものの、自然堤防など微高地を利用した巧まざる多目的遊水地として農業が営まれているのである。

雨季は米作にとって幸いである。一方、乾季には河川、運河、ため池を問わず、徐々に水位が低下し、河川であれば日本流に言えば河川敷や河床が露出してくる。勿論河川敷はすでに田圃となっており、ボロ米の生産に寄与するのである。小さな河川や運河でも同様に、それが猫の額ほどの区画であっても、底地が現れた時点で農民は田植えをする。ほとんど雨の降らない乾季は、次の雨季を待つまで水の補給は覚束ない。つまり農民は雨季と乾季のタイミングを十分に理解しながら、最後の一滴まで水を使いつくすのである。

完璧に近いリサイクル社会の表象は、この国に氾濫する車を見れば一目瞭然である。先進国と言われる国の廃車が輸送の動脈を担っているのである。それは、車の外形も勿論、部品にまで到る。チッタゴン近くで廃船の解体現場を見たが、その近傍の街道筋には一大マーケットが展開しており、食料品以外なんでも揃っているのである。

こうした反面、町や村に限らずゴミはいたる所に散乱している。それらゴミは、紙類、衣類、食料、化学製品、建築材料など多岐に渡るが、紙や衣料、その他売れるものは全て回収される。それを生業としている人々がいるか

らであり、重要な資源の流通経路となっているのである。ダッカで20haの広さを持つゴミの最終処分場を見たが、次々と運ばれてくるゴミは、資源として利用価値の無い、あるいは利用価値を求めようにも最早分別不可能なゴミの中のゴミといっても過言ではない。それでも、残された紙類、衣類などを求めて集め回る人々がいるのである。勿論それは生業である。回収できるものは生計の足しとし、口にできるものはカラスなど鳥類やねずみの餌となり、それこそ残った廃物が大地に戻るのである。

農村においては、プラスチックやビニールの類以外、ゴミは出ないように思われる。低地部に位置する雨季の農村は、集落の周りは水面で覆われ、ホテイアオイの群生が見られるようになる。ホテイアオイは日本では通常、厄介者扱いである。ところがここでは、茎の柔らかなうちは家畜の飼料となり、土手で乾かしては燃料となり、水位の低下する乾季には窒素を多分に含んだ肥料となるのである。家畜排泄物や腐敗分解できる厨芥などは全てリサイクルの輪に乗っているのである。

かといって、こうした幾多の現象が巧まざるリサイクルシステムを形成しているとは一義的には言い切れない。廃車同然の車の燃費は悪い。レンタ・カーを借りた場合の通常のガソリン燃費の計算は 6km/リットルであり、排ガスのもたらす社会的費用の大きさを考慮すべきだろう。

この国のゴミ問題は、排ガスも含めて、ゴミを無頓着に捨てる人々がほとんどであることと、拾う対象にならない排ガスやプラスチック、ビニールの類の散乱にあるように思われる。

ラールバーグ・フォート（ダッカ市内にあるムガール帝国の城館跡：17世紀築造）内に設置されたゴミ箱

2008 多摩川源流祭に参加して（5月4・5日）

本会会員　大澤　佳子

私にとって２回目の小菅村源流祭です。初回は10年ほど前、“お松焚き”の火の力に圧倒されました。

ゴールデンウイークなのにたいした渋滞にもあわず、木々は芽吹き、山桜・山藤・ピンク・白や黄色のすべての春の花が咲き競う里山をバスは走り小菅村へ。

祭り会場は村人総出で、村の食材で料理した出店がたくさんあり、昼食を楽しみ、“小菅の湯”で汗を流しました。

いよいよクライマックスの源流祭です。なんと言っても“お松焚き”３本に火が入り凄い勢いで力強く燃え上がります。今年も炎の力に感動でした。

翌朝、おにぎりをリュックに入れて笠取山へのハイキングです。アスファルトの道しか歩いていない私にとって、山歩きは源流祭だけなので不安でしたが、今回は少し心にゆとりができ、小川の流れや木の葉の緑を見ながら水干まで登ることができました。

前回は水神様が祭ってある岩山の水が枯れていましたが、４月に雨が多かったのか、ぽたり～ぽたりと水滴で岩肌が湿っていて、“これぞ源流”かな・・・・　丹波山村に寄り“のめこい湯”で疲れをとり帰路へ。

先達さんをはじめ、同行の皆様のおかげで笠取山に登ることができました。至れり尽くせりの２日間、ありがとうございました。

2009年スコットランドでのバルトン記念事業開催に向けて

バルトン記念基金管理委員会では、2006年に引き続き、来年2009年に2回目のスコットランドでのバルトン記念事業開催を企画しています。内容は、前回の記念事業成功に貢献された方へのバルトン賞授与、ネピア大学構内に建立したバルトン記念碑のまわりに桜の木の植樹、ベンチの設置、そして記念シンポジウムの開催などです。スコットランド側からも受け入れ承諾の明確な回答を得ています。

なお、スコットランドでは国民的詩人、ロバート・バーンズの生誕250年にあたる来年2009年をホームカミング・スコットランドとして、同国が世界にもたらした多種多様な文化（ゴルフ、ウイスキー、創造的なスコッツ精神、文化遺産）を網羅した祭典が年間を通じ各地で催されることになっています。この年に、スコットランド人バルトンの曾孫鳥海幸子さんはじめ、スコットランドゆかりの方々が祖国を訪問されることは意味が深いと考えられます。

関西支部・第５回講演会・パネルディスカッションのお知らせ

関西支部では第５回講演会・パネルディスカッション「下水道整備と水質の変化」を関西水環境ネット協賛により、日本下水文化研究会関西支部の総会（拡大運営委員会）をかねて下記により開催します。多数ご参加下さい。（参加費無料、支部HPに申込書があります）

記

主催　NPO法人　日本下水文化研究会関西支部
日時　11月15日（土）　13時00分～17時00分
場所　大阪NPOプラザ　大阪市福島区吉野4-29-20　TEL　06-6465-8390
基調講演　「下水道の概成と淀川及び宇治川・木津川の水質変化」　13:15～14:45
摂南大学　教授　海老瀬　潜一
パネルディスカッション　「下水道整備と水質の変化」　15:00～17:00
パネラー　海老瀬潜一（摂南大学教授）、駒井幸雄（大阪工業大学教授）、玉井義弘（㈱日水コン）、砂田八寿子（NPO法人関西消費者連合会消費者相談室長）
コーディネーター　NPO法人日本下水文化研究会関西支部　運営委員　山口征宏
連絡先　日本下水文化研究会関西支部
〒537-0025 大阪市城東区中道町3丁目15-16

「水と衛生にかかわる開発援助」フォーラム会場案内図（1ページ参照）

運営委員会・事務局より

● 会員の小松建司さんのご尽力によりホームページのリニューアルの準備を進めています。リニューアル後は会員の皆さまとの交流・情報交換の機能を充実できるよう、会員各位からの写真やお便りなどを掲載していきたいと思います。お楽しみに。

ふくりゅう 通巻58号　目次

「水と衛生にかかわる開発援助」フォーラム開催のお知らせ	1
『バングラデシュ農村地域での水と衛生に関わる生活改善活動』を始めるにあたって	1
旧事九官録巻７　ランドルト環の事	3
第43回定例研究会（兼第52回屎尿・下水研究会例会）報告「下水道管路管理の課題」	4
バングラデシュ便り5号　リサイクル社会	4
2008多摩川源流祭に参加して	5

編集後記　「バングラデシュ便り」では毎号ユニークな視点を提供してもらっています。私ももう20回以上訪バを繰り返していますが、いまだにいろいろな発見があります。今回はそのなかからいくつか。▶下の写真は味が良いと評判のポンド・サンド・フィルターへ遠くから自転車で水を汲みにきた男性たちです。プロジェクトがうまくいけば「水汲みは女の仕事」という固定観念から抜けられないバングラデシュの男性の意識まで変えてしまうという例です。一方で、我々がプロジェクトサイトの候補としている村では、病気になっても汲みに行かせる、少し時間がかかっただけでも責めるような夫たちも少なくないようです。▶別の候補の村で、井戸の状況を村人に尋ねたらすぐに10人ぐらい集まってきて、さまざまな“情報”が提供されます。「村には深井戸は２つあるが、どちらも私用で、浅井戸はすべてヒ素に汚染され、安全な飲み水は手に入らない」と元教師だという老人が言うとみんな頷く。しかし、村の中を少し歩くと政府が最近作った共用の深井戸がある。いったい、我々をだますつもりなのか、困っていると言えば井戸を掘ってくれると思っているのか、信頼できる情報はなかなかいきわたらないのか。この目で確かめつつ、住民の声を広く聴きながら、計画を進めていかなければと思います。

（酒井　彰）

特定非営利活動法人　日本下水文化研究会
〒162-0067　新宿区富久町6-5　NJS富久ビル別館3F
TEL & FAX 03-5363-1129 e-mail: jade@jca.apc.org

「ふくりゅう」では、原稿募集をしております。「水」について思うこと、身近な話題、会に対するご意見やご提案、どのようなことでも結構ですから事務局までお送りください。

ホームページもご覧ください
http://www.jca.apc.org/jade/index.htm
関西支部　http://www1.kcn.ne.jp/~k-atsuhi/